

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 29 日現在

機関番号：12603

研究種目：基盤研究(A)

研究期間：2010～2013

課題番号：22242023

研究課題名(和文) ヨーロッパ境界地域の歴史的経験とパトリア意識 / 市民権

研究課題名(英文) Patria and Citizenship in the historical experiences of European borderlands

研究代表者

篠原 琢 (SHINOHARA, Taku)

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授

研究者番号：20251564

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 34,400,000円、(間接経費) 10,320,000円

研究成果の概要(和文)：本プロジェクトは、ポーランド=リトアニア連合王国(ロシア帝国西部諸県)、ハプスブルク帝国、沿バルト地域を中心に、近世から現代にいたるネーション、およびナショナリズムの動態を分析してきた。ここでは近世から20世紀にいたる各時代の政治社会におけるネーションの多次元的な機能と構成が分析された。近世期のネーションは、多様な政治的、文化的文脈で構築され、さまざまな価値と関連付けられ、ネーション理解は単一の政治社会に収斂しない。

近代のネーションは政治社会における多様な交渉を全的に文脈化する傾向をもつ。本研究は個別研究と比較史の方法で境界地域におけるこの過程を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：Our research project focused on dynamism of constructing nation and nationalism in regions of former Polish Lithuanian Commonwealth (western provinces of Russian Empire and western Soviet republics, Habsburg Monarchy and the Baltic region). Multidimensional functions and construction of nation is here analyzed in a given political society in each period from the early modern times up to the 20th century.

Early modern "nation" is constructed in manifold political and cultural context, related to various values such as political-dynastic, imperial, humanistic-intellectual, confessional, local, municipal, linguistic, of estates, guilds and other corporations, etc. The understanding of nation is not converged to a single political society. Modern nation claims holistic contextualization of various negotiations in a political society. The project reveals this process in European borderlands by empirical case studies and comparative method.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・西洋史

キーワード：市民権 ナショナリズム 東ヨーロッパ 中央ヨーロッパ 境界地域

### 1. 研究開始当初の背景

本研究は、過去 10 年の国内外における中・東欧史研究の質的・量的飛躍を総括し、これを境界地域研究として再編し、新しい地平を模索するものである。研究動向の特徴は以下の点にある。

(1) 20 世紀以前の中・東欧社会の文化的複合性・多元性に大きな関心が寄せられるようになった。特に中・東欧の都市社会を特徴づけた多言語的・多宗派的共存・並存の様態が明らかにされることで、中・東欧の歴史学を規定していた国民史の叙述法が相対化されることになった。さらに、宗派ネットワークや文芸共和国の広がりや重なりの中で、中・東欧の多元性を理解する必要が明らかとなった。

(2) 中・東欧においては、こうした文化的複合性のなかで、国民的帰属によって規定される市民的公共性の圏域が、相互に競合しながら形成される過程が明らかにされた。ロシア・ソ連史においても、国民形成と市民社会化の問題が積極的に論じられるようになった。

(3) 第二次世界大戦中から戦後にかけての時期に中・東欧で展開した人種主義的絶滅政策、住民の難民化・強制移住についての実証研究が急速に進展した。特にユダヤ人絶滅政策を中・東欧という場で理解しようという動向が強くなった。

これらの傾向を総括し、近世から現代への長期的な展望を持ったヨーロッパの境界地域史研究を構築する必要があった。

### 2. 研究の目的

本「ヨーロッパ境界地域の歴史的経験とパトリア意識 / 市民権」は、ヨーロッパの境界地域における複合的なパトリア意識と市民権の問題を、帝国研究、境界地域研究、記憶論の成果に立って明らかにしようとした。ここでは境界地域を、政治的・文化的・宗派的な断裂がダイナミックに作用しながらも、共通の空間・秩序意識が観察される場所ととらえる。本研究の目的は、ヨーロッパの東部境界地域において、パトリア意識が複合性の下に一つの全体として成立していた近世から、二つの世界戦争によってそれが最終的に破局を迎えた現代までを長期的動態のなかで検討し、境界地域の歴史的分析・叙述方法を構築することを目的とする。

### 3. 研究の方法

本研究では、「パトリア」を政治的、身分制的、文化的、宗派的文脈によって構築された帰属意識を支える空間概念として捉える。「市民権」とは、公共善を実現すべきパトリアへの積極的な参与を見込む権利として考えられる。本研究は、パトリアと市民権を鍵概念としながら、ヨーロッパの境界地域の総合的把握を目的とするものなので、研究分担者の個別研究と、全体を通じた方法論的考

察、叙述法の模索は不可分の関係にある。従って、研究分担者は、以下 3 つの研究班を構成して若手研究者を迎えながら個別研究を推進する一方、それらを通史的・垂直にまとめるよう、国外の研究者・研究機関の協力を得て国際会議、ワークショップが行なって個別研究の連携・洗練をはかり、成果を公開する。研究班 A「近世的パトリア概念の解明」は、近世期のパトリア概念を政治的・文化的断裂がダイナミックに作用する共通の空間・秩序意識と捉えて分析する。B 班「国民形成と市民権」は、市民権の概念と実践、国民の社会の形成過程を近世からの連続性の下に明らかにする。C 班「現代史における断絶と記憶」は文化的複合性を持った境界地域を破壊した 20 世紀の暴力とその記憶を分析する。

### 4. 研究成果

本プロジェクトは、ポーランド=リトアニア連合王国（ロシア帝国西部諸県）、ハプスブルク帝国、沿バルト地域を中心とするヨーロッパの境界地域において、近世から現代にいたるネーション、およびナショナリズムの動態を分析してきた。ここでは近世から 20 世紀にいたる各時代の政治社会におけるネーションの多次元的な機能と構成が分析された。

近世期のネーションは、多様な政治的、文化的文脈で構築され、さまざまな価値と関連付けられ、ネーション理解は単一の政治社会に収斂しない。この様態の解明が、研究開始当初、仮説的であったパトリア概念に相当するものとして評価できる。

近代のネーションは政治社会における多様な交渉を全的に文脈化する傾向をもつ。19 世紀におけるリベラリズムによる政治秩序の構築は、国民語による政治参加を要請し、近代の市民社会は、歴史的には国民の社会として成立した。19 世紀後半から 20 世紀に至る時期は、社会における政治的領域の拡大、福祉国家を見通した私的領域の政治化によって特徴づけられる。これは、従来、政治参加から排除された人々の解放への過程であったと同時に、社会の諸局面での国民化が進行することになった。

総力戦体制は、より広範な人々（原理的には社会の全構成員）の参加と動員を必要とする。それは徹底的な社会の「民主化」、democratization をもたらすとともに、私的領域の極小化を意味することとなった。ここにおいて、ネーションという場合は、多元的な交渉を全的に文脈化することになったのである。このことは、ネーションをめぐる表象、イデオロギーの単一化を意味するものではない。逆に、多様な競合、交渉、争いを文脈化することによって、ネーション理解そのものは、無限に多様化していった。

本研究は個別研究と比較史の方法で境界地域におけるこれらの過程を明らかにした。

5. 主な発表論文等  
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 41 件)

吉岡潤「失われた東部領/回復された西部領 ドイツ・ポーランドの領土とオデル・ナイセ国境」、『ドイツ研究』48号、2014、29-42、査読無

割田聖史「プロイセン議会成立期(1849年-1850年)におけるポーゼン問題」、『青山史学』32、2014、19-37、査読無

古谷大輔「アジアとヨーロッパを繋ぐ媒介者たち 18世紀ヨーロッパの博物学界におけるスウェーデン出身者の役割」、『Ex Oriente』21号、2014、61-88、査読無

中澤達哉「ネーション・ナショナリズム研究の今後」、『現代史研究』59号、2013、37-53、査読有

割田聖史「ビスマルクとミツケヴィチポズナンの記念碑と記憶」、『人文社会科学論叢』22号、2013、15-33、査読無

Akiyama Shingo, “Greek Merchants, Their Wives, and Transiency of Migration in Eighteenth-Century Hungary,” *Mediterrán és Balkán Fórum*, VII (1), 2013, 2-8, 査読無

池田嘉郎「ソヴィエト帝国論の新しい地平」、『世界史の研究』234号、2013、1-12、査読無

平田武「一九五六年ハンガリー革命におけるピボーの政治体制構想」、『法学(東北大学法学会)』76号、2013、718-757、査読無

割田聖史「一八四〇年代前半のポーゼン州におけるユダヤ教徒 一八四二年、一八四三年の政府調査から」、『キリスト教文化研究所研究年報』45号、2012、57-86、査読無

青島陽子「農奴解放と国民教育 大改革期ロシアにおける国民学校のあり方をめぐって」、『ロシア史研究』90号、2012、43-65、査読有

中澤達哉「18-19世紀ハプスブルク複合王政下の近代国民形成と政治的正統性 ヨーロッパの「極端なる典型」」、『西洋史論叢』34号、2012、19-29、査読無

小森宏美「体制転換と歴史認識 エス

トニアのソヴィエト化をめぐる複数の語り」、『地域研究』12-1、2012、234-251、査読有

池田嘉郎「帝国、国民国家、そして共和制の帝国」、『Quadrante: クヴァドランテ』14号、2012、81-99、査読有

KAJI Sayaka, “Intellectuals in Vilnius and the Early Nineteenth-Century Concept of Lithuania: The Society of Scoundrels (Towarzystwo Szubrawców) and the Local Society,” *Lithuanian Historical Studies*, 16, 2012, 143-168, 査読有

割田聖史「「境界地域」を叙述する オストマルク協会編『ドイツのオストマルク』(1913年)を読む」、『群馬大学国際教育・研究センター論集』9号、2010、15-32、査読有

池田嘉郎「ネップ期ソ連における国家と都市管理 内務人民委員部の活動から見る」、『ロシア史研究』86号、2010、31-47、査読有

[学会発表](計 46 件)

篠原琢「複合的パトリアから全体論的ネーションへ 近世から現代への見通し」第64回日本西洋史学会大会シンポジウムB2「ヨーロッパ境界地域の歴史的経験とパトリア/市民権」2014年6月1日、立教大学(東京)

篠原琢「祖国をめぐる変奏曲 ベーメン・ドイツ人歴史協会における歴史の再構成」第64回日本西洋史学会大会シンポジウムB2「ヨーロッパ境界地域の歴史的経験とパトリア/市民権」2014年6月1日、立教大学(東京)

吉岡潤「戦後ポーランド領土の創造と想像 国境線移動・強制移住・引き揚げ」第64回日本西洋史学会大会シンポジウムB2「ヨーロッパ境界地域の歴史的経験とパトリア/市民権」2014年6月1日、立教大学(東京)

古谷大輔, “Comment on prof. Peter Mata and Lucie Storchova, 本研究課題主催国際シンポジウム“Patriotism and Composite State in Early Modern Central Europe,” 2014年3月10日、東京外国語大学本郷サテライト(東京)

中澤達哉「コメント」第64回日本西洋史学会大会シンポジウムB2「ヨーロッパ境界地域の歴史的経験とパトリア/市民権」2014年6月1日、立教大学(東京)

中澤達哉, “Comment on prof. Peter Mata and Lucie Storchova, 本研究課題主催国際シンポジウム“Patriotism and Composite State in Early Modern Central Europe,” 2014年3月17日, 京都大学(京都)

小山哲「ポーランド・リトアニア共和国における「市民」概念と公共性」, 第64回日本西洋史学会大会シンポジウム B2「ヨーロッパ境界地域の歴史的経験とパトリア / 市民権」, 2014年6月1日, 立教大学(東京)

鈴木健太「社会主義ユーゴスラヴィアにおける「ナロード」 1980年代末の大衆運動とナショナリズム」, 第64回日本西洋史学会大会シンポジウム B2「ヨーロッパ境界地域の歴史的経験とパトリア / 市民権」, 2014年6月1日, 立教大学(東京)

古谷大輔, “Comment on prof. Oliver Zimmer and prof. Balazs Trenchenyi,” Nationalism Conference “Thinking New Perspective to Nationalism in Europe from Historical Study,” (本研究課題主催国際シンポジウム) 2013年4月4日, 京都大学(京都)

中澤達哉, “Comment on prof. Oliver Zimmer and prof. Balazs Trenchenyi,” Nationalism Conference “Thinking New Perspective to Nationalism in Europe from Historical Study” (本研究課題主催国際シンポジウム), 2013年4月4日, 京都大学(京都)

池田嘉郎, “Putting Together an Imperial Jigsaw Puzzle: How the Russian Empire was Envisaged in the Health Resort Boom during the First World War,” The Fifth East Asian Conference on Slavic Eurasian Studies (ICCEES Asian Congress), 2013年8月10日, 大阪経済法科大学(大阪)

青島陽子, “Can Villagers be Russians?: Perspectives on Elementary Education during the Great Reforms,” 44th Annual Convention of ASEES (Association for Slavic, East European, and Eurasian Studies), 2012年11月18日, New Orleans Marriott (アメリカ合衆国)

中澤達哉「1989年以降世代の東欧史学と二宮宏之の歴史学」, ヨーロッパ近世史研究会, 2013年3月23日, 京都大学(京都)

Koyama Satoshi, “Discussion panel: A historian in the public space,” The 2nd International Congress of Polish History, 2012

年9月13日, Auditorium Maximum of Jagiellonian University (ポーランド)

池田嘉郎「革命期ロシアにおけるリーダーシップ 構想・制度・人物」, ロシア・東欧学会、ロシア史研究会、JSSEES、日本ロシア文学会 2012年合同大会、2012年10月7日、同志社大学(京都)

池田嘉郎「戦後歴史学の中のロシア史研究」, 歴史学会第37回大会、2012年12月2日、成蹊大学(東京)

青島陽子「「農奴解放」と「国民教育」「大改革」期ロシアにおける国民学校制度成立過程」, ロシア史研究会、2011年10月22日、青山学院女子短期大学(東京)

[図書](計 39 件)

武田佐知子編(古谷大輔ほか 31 名著)『交錯する知 衣裳・信仰・女性』思文閣、2014、688(古谷「リンネの「帝国」と「使徒」の使命」 スウェーデンから見たテューンバリ訪日の背景」643-669)

小沢弘明・山本明代・秋山晋吾編(秋山晋吾ほか 9 名著)『つながりと権力の世界史』彩流社、2014、272(秋山「近世国制とディアスポラ 18世紀トランシルヴァニアのカトリック・ブルガリア人」25-45)

小山哲『ワルシャワ連盟協約(一五七三年)』東洋書店、2014、90

池田嘉郎編(池田嘉郎、中澤達哉ほか 7 名著)『第一次世界大戦と帝国の遺産』山川出版社、2014、296(池田「第一次世界大戦をより深く理解するために」3-23;「コーポラティブな専制から共和制の帝国ソ連へ」166-190、中澤「二重制の帝国から「二重制の共和国」と「王冠を戴く共和国」へ」135-165)

大津留厚ほか編(中澤達哉、秋山晋吾ほか 30 名)『ハプスブルク史研究入門 歴史のラビリンスへの招待』昭和堂、2013、336(中澤「言語と民族 / 国民の間 1 ネーション(民族 / 国民)」153-158、秋山「農村と地方都市」73-80)

篠原琢・中澤達哉編(篠原琢、戸谷浩、中澤達哉、秋山晋吾ほか 2 名著)『ハプスブルク帝国政治文化史 継承される正統性』昭和堂、2012、241(篠原「近世から近代に継承される政治的正統性」1-10、同「国民がみずからの手で! チェコ国民劇場の建設運動」227-253、戸谷「帝国の南辺が作られる 軍政国境地帯の性格の転換と近代」137-159、秋山「貴族の自治

の誕生 中・近世ハンガリー史のなかの  
県制度」106-136、中澤「ハプスブルク家と  
ハンガリー王冠 戴冠儀礼と統治の正  
統性」65-104)

Sekiguchi T. (ed.) ( Aoshima Yoko, Komori Hiromi, Koyama Satoshi, Kaji Sayaka ほか 5 名著 ), *From Krakow to Vilnius: Report of the 2nd International Itinerant Seminar "The Common Heritage of Eastern Borderlands of Europe"* (2010), Tokyo University for Foreign Studies, 2013, 119 ( Aohisma, "Between Indifference and Overreaction: A Note on "Narod Schools" in the Northwestern Provinces of the Russian Empire in the 1860s": 37-46, Komori, "Non-Territorial Autonomy and the Jews in Interwar Lithuania and Estonia": 31-36, Koyama, "A Battle between the Duchy and the Kingdom" - Remarks on the Orzechowski vs. Rotundus Controversy on the Polish-Lithuanian Union in 1564-66": 55-68, Kaji, "Research on the History of Lithuania at Vilnius University in the Early Nineteenth Century": 47-53 )

中嶋毅編 ( 青島陽子、池田嘉郎ほか 14 名著 ) 『新資料で読むロシア史』山川出版社、2013、352 ( 青島 「大改革とグラスノスチ 十九世紀中葉の教育制度改革における『批評集』」57-60、池田 「敗北後のジノヴィエフ 『ヴェ・イ・レーニン』構想メモ」128-145 )

森原隆編 ( 中澤達哉ほか 18 名著 ) 『ヨーロッパ・「共生」の政治文化史』成文堂、2013、424 ( 中澤 「ハンガリー初期ジャコバン主義の「王のいる共和政」理論 近代ヨーロッパ共和主義の多様性と共生の諸形態」84-105 )

ケヴェール・ジェルジ ( 平田武訳 ) 『身分社会と市民社会 19 世紀ハンガリー社会史』刀水書房、2013、xi + 338

塩川伸明ほか編 ( 篠原琢、小森宏美ほか 8 名著 ) 『ユーラシア世界 5 国家と国際関係』東京大学出版会、2012、282 ( 篠原 「中央ヨーロッパを思い出す」227-253、小森 「国と国際が溶解する空間としてのバルト地域」95-117 )

割田聖史 『プロイセンの国家・国民・地域 19 世紀前半のポーゼン州・ドイツ・ポーランド』有志舎、2012、xvi + 361

篠原琢編 ( 小山哲ほか 12 名著 ) 『ヨーロッパ東部境界地域の共有遺産研究 I ガリツィア』東京外国語大学、2011、179 ( 小山 「「貴族の共和国」とウクライナ 植民地的共和主義をめぐる覚え書」87-116 )

小山哲・上垣豊・山田史郎・杉本淑彦編 ( 小山哲、吉岡潤ほか 38 名著 ) 『近現代( 大学で学ぶ西洋史 )』ミネルヴァ書房、2011、xiv + 403 ( 小山 「第一部総説 近世のヨーロッパ」2-17; 「第三章三節 東中欧・ロシア」77-83、吉岡 「第十章第三節 第二次世界大戦」296-304 )

仙石学・林忠行編 ( 平田武、小森宏美ほか 8 名著 ) 『ポスト社会主義期の政治と経済 旧ソ連・中東欧の比較』北海道大学出版会、2011、362 ( 平田 「「歴史の遺産」とその影響 旧東欧諸国における政治発展と制度選択・デモクラシー」19-48、小森 「エストニアとラトヴィアの政党政治比較 歴史的要因としてのロシア語系住民問題を軸に」203-231 )

〔その他〕  
特に言及するものはない。

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

篠原 琢 ( SHINOHARA, Taku )  
東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授  
研究者番号：20251564

### (2) 研究分担者

戸谷 浩 ( TOYA, Hiroshi )  
明治学院大学・国際学部・教授  
研究者番号：00255621

吉岡 潤 ( YOSHIOKA, Jun )  
津田塾大学・学芸学部・准教授  
研究者番号：10349243

割田 聖史 ( WARITA, Satoshi )  
青山学院大学・文学部・准教授  
研究者番号：20438568

青島 陽子 ( AOSHIMA, Yoko )  
神戸大学・国際文化学研究所・講師  
研究者番号：20451388

古谷 大輔 ( FURUYA, Daisuke )  
大阪大学・言語文化研究所・准教授  
研究者番号：30335400

小森 宏美 ( KOMORI, Hiromi )  
早稲田大学・教育・総合科学学術院・教授  
研究者番号：50353454

秋山 晋吾 ( AKIYAMA, Shingo )  
一橋大学・大学院社会学研究科・教授  
研究者番号：50466421

中澤 達哉 (NAKAZAWA, Tatsuya)  
福井大学・教育地域科学部・准教授  
研究者番号：60350378

小山 哲 (KOYAMA, Satoshi)  
京都大学・文学研究科・教授  
研究者番号：80215425

池田 嘉郎 (IKEDA, Yoshiro)  
東京大学・大学院人文社会系研究科(文学  
部)・准教授  
研究者番号：80449420

平田 武 (HIRATA, Takeshi)  
東北大学・法学研究科・教授  
研究者番号：90238361

(3)研究協力者

梶 さやか (KAJI, Sayaka)  
岩手大学・人文社会科学部・准教授  
研究者番号：70555408